

2024 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 氏名 千葉 萌加

〈 研修概要 〉

2025 年 2 月 25 日から 3 月 6 日の 10 日間、ベトナム研修に参加しました。本研修では、5 日間ずつホーチミン市とフエ市を訪問しました。ホーチミン市では、チョーライ病院での 3 日間の臨床実習を行いました。フエ市では、フエ医科薬科大学での 3 日間の国際交流プログラム、フエ医科薬科大学附属病院での臨床実習に参加しました。

〈 研修参加の目的 〉

私は積極性を高めるために本研修に参加しました。私は初対面の人と話すことが苦手で、特にグループでの活動で積極的にコミュニケーションを取ることに不安があり、つい一歩後ろから見守ることが多く自分の意見や考えを主張することが難しいです。昨年ベトナム研修に参加された先輩方の報告会で、「失敗を恐れず、自ら進んで話ができるようになった」との言葉に、失敗を恐れず挑戦する姿勢を身につけ、誰に対しても積極的に話しかけられるようになりたいと思い、参加を決意しました。

〈 研修で学んだこと 〉

チョーライ病院での臨床実習

チョーライ病院はベトナム南部地域最大の医療機関であるため、病院内は常に混雑している状況で、待合室はどこも人で溢れかえっていました。1 日の検査数も非常に多く、効率を重視した診療がなされていました。例えば、検査が終わり寝台を下ろす際には次に検査を受ける患者さんがすぐにその部屋に入り、交代する流れが定着しており、検査にかかる時間を少しでも短縮されていました。また、小さい子供や高齢の患者さんに対しては家族が介助や補助を行い、診療放射線技師や看護師の負担を減らしていました。当たり前に患者さんの家族が検査の補助をする姿を見て、病院に訪れる多くの人々がその必要性を理解しているのだと感じました。日本の医療では被ばく低減や患者接遇が重要視されていますが、ベトナムの医療では効率が最も重視されていました。日本の医療現場しか知らない私にとって、国が異なれば重視するポイントも異なることを学ぶことができ、貴重な経験となりました。

多忙な業務の合間、診療放射線技師の方が CT 装置について説明をしてくださいました。日本で使用している装置との違いについても質問してくださり、そのやり取りの中で、メーカーや搭載されている OS（オペレーティングシステム）の違いを理解することができ、実際に使用している機器に関する知識を深めることができました。また、私たちからの質問にも親切にわかりやすく答えてくださいました。最初は英語で質問することに不安があり、翻訳機を使用する場面もありましたが、ジェスチャーを交えることで伝わることも多く、不安であるから行動しないのではなく、挑戦してみる事が大切であると実感しました。

フエ医科薬科大学附属病院での臨床実習

フエ医科薬科大学附属病院では、主に診断部門にてポジショニングの補助や一般撮影の画像処理を経験させていただきました。膝関節撮影の正側のポジショニングをさせていただきました。初めてポジショニングをしたので、座学の内容がすぐには思い出せず、少し戸惑いましたが、現地学生の親切なサポートで正しいポジショニングができました。この経験を通じて、自分の学習不足を痛感するとともに座学が臨床に結びついていることを改めて実感しました。日本の臨床実習では、学生がポジショニングを経験することが難しいため、積極的に行うことを心がけました。また、一人で画像処理を行うことに不安がありましたが、この研修を通して積極性を身につけたいという思いから、トリミングやコントラストの調整などの画像処理にも積極的に取り組み、何十症例もの経験させていただきました。正しくできるか不安でしたが、現地学生から「できているから自信を持っていいんだよ」と声をかけてもらえた時、積極的に経験させていただくことの大切さを実感しました。特に印象的だったのは、フエ医科薬科大学の学生たちがどの部位の撮影のオーダーが来ても迅速かつスムーズにポジショニングを行っていたことです。それは、彼らが座学で学んだ後すぐに臨床実習を重ねているからであり、数多くの実践的な経験を積んでいるからだと思います。このような実力を身につけるためには、私も今後臨床実習でできるだけ多くのことを経験し、技術を磨いていく必要があると感じました。5月から始まる臨床実習で、これまで学んだことを実際に活かし、確かな技術を身につけて、将来、業務をスムーズに実施できるように努力したいと思いました。



▲臨床実習の様子 1



▲臨床実習の様子 2

チョーライ病院のスタッフの方々、フエ医科薬科大学の学生との交流

チョーライ病院のスタッフの方々がウェルカムパーティーに私たちを招いてくださり、食事を共にする機会がありました。食事中、お皿やグラスが空になる前に食事を盛ったり、飲み物を注いでくださったりする姿勢に感動し、これこそがおもてなしであることを実感し、私も今後人をもてなす際には視野を広くし気遣いのできる人になりたいと思いました。おすすめのカフェやお土産屋さんを親切に教えてくださり、初めて訪れる国で不安であったため心強く、感謝の気持ちでいっぱいでした。

フエ医科薬科大学の学生との交流では、フエン・コン・ソン・トゥオンジン寺院、ティエンム寺、グエン朝王宮など、ベトナムの伝統的な建造物や歴史的な場所を案内してもらいました。現地の学生たちは私たち一人一人が希望する観光地などに合わせた観光プランを立てて案内してくれました。その際、ベトナムの歴史や文化についても教えてくれて、彼らの自国に対する深い愛情と誇りを感じました。本研修に参加する前は少しベトナム語を勉強していましたが、挨拶程度の簡単な言葉しか覚えられませんでした。それでも、「ありがとう」や「またね」をベトナム語で伝えると、学生たちは喜んでくれました。ベトナム語を話すことに対して発音や言い回しに不安があり、最初は少し恥ずかしさもありましたが、日本人が外国の方から「ありがとう」と言われて嬉しく感じるように、私がベトナム語で感謝の気持ちを伝えたことが学生たちにも喜ばれたことが励みとなりました。言葉が持つ力や文化を超えたコミュニケーションの大切さを改めて実感しました。さらに、ベトナムのアオザイと日本の着物や浴衣について話したことも印象に残っています。異文化同士で伝統衣装について話すことは、互いの文化をより深く理解し合う素晴らしい機会でした。学生たちが日本語の使い方について質問してくれたことも嬉しかったです。彼らが日本に関心を持っていることを知り、私たちの研修を温かく受け入れ、ベトナムについて教えてくれたことへの恩返しとして、私自身がもっとベトナムの文化について事前に学んでいればより深い異文化理解につながり、有意義な時間を過ごせたのではないかと感じています。



▲チョーライ病院の方々とのウェルカムパーティー



▲グエン朝王宮での集合写真



▲フエの学生とともに授業を受ける様子



▲フエの学生の前でプレゼンをした様子

〈 まとめ 〉

本研修を通じて、話し質問し会話を広げることの大切さを学びました。これは私が本研修で身につけたかった積極性です。私は、最初は言葉の壁や文化の違いに対する不安がありましたが、現地の方々との交流を通じて、コミュニケーションはただ言葉を交わすだけでないと気づきました。ジェスチャーや簡単な英語を使うことで、相手も同じように身振り手振りを交えながら対応してくれ、伝えたいことがしっかり伝わる場面が多くありました。自分が言いたいことを伝えることができた瞬間や、相手の言いたいことが理解できた瞬間は嬉しい気持ちになりました。母国語が異なっても、心から相手を理解したい、伝えたいという気持ちで表現を工夫することによって気持ちは通じ合うということを実感できました。また、病院スタッフの方々や学生たちの温かいおもてなしや、ベトナムの文化に触れる機会を得たことで異文化交流の大切さを深く感じることができました。本研修を通して何事にも挑戦することの大切さを学びました。言葉や文化の違いに直面したとき、最初は不安を感じましたが、挑戦することで新たな発見や成長を得ることができました。どんな困難な状況でも積極的に挑戦し、学ぶ姿勢を持ち続け、将来患者さんの役に立つことのできる診療放射線技師になれるよう精進したいと思いました。

〈 謝辞 〉

最後に、ご多忙の中研修を受け入れてくださったチョーライ病院の方々、フエ医科薬科大学附属病院の方々、フエ医科薬科大学の先生方および学生たちに深く感謝申し上げます。また、私たちを安全に引率してくださった玉木長良学長、霜村康平講師、石田翔太助教、本谷崇之助教、並びに準備から手厚く支援してくださった本学職員の方々に感謝申し上げます。本研修に快く送り出してくれた両親にも感謝申し上げます。